和漢字若流

亨

ホ 2
314
2

門 和 2
號 314
巻 之

宮城縣図書館

和漢字名録巻之上 地

紀藩 永尾浦 艸醫 藤井君校述

は はゝ 是同じ假字なれ・扱先よも言はく・あわやのこ音は能生らて学び・下の假名まよ弟四ゐい帝まそ多くは而生のはひふへほよ易ふるえ・而生の用はひふへほの音よりあわの二音よ色きはちゆ紀ゐ・唱はあわの二音を以て唱へ・假字をばはひふへほよ易ふる事え・假令ば逢逢逢逢逢逢の如く假はい准知るべし・はひふへほ下よ至ても濁る時はあわの二音を借る事なく・身毛を以て唱へ・又まみむめもよ通ハ唱ふえ・浮浮浮浮浮浮浮浮浮浮浮浮の如し・肩橋言よ㊀は一字扱ひて字岩祝・川産汀㊀はそれ㊀わと達むとふえ・此外常盤豎怒産事

浦末八橋本橋壱岐尾張湾海素名廣沢柏清菱京堅濱子
早振等の類はの假名をわと讀むと又者の字と撰字なるい誤字
う清字の下と等時の事と先来年去堅手若なと〻誤字の下と
等時い来年去堅手若と〻なと清じて唱ふ〻ぜん　ぬの旧字うてぬと
下の若と反切をれば　な　と序ぬ　是吳音はな同の例と又昨日若今月
若なと〻清字の下ていい昨日若今月若と〻と清じて唱ふ是い額
と若の字と反切をれば　さ　と濁る吳音はた同の例ていい二例　あ
かさたなはまやらわと通じると又者と自者の事濁と清じると
ち言〻〻若ちちると上の詞のふの出ると入声同の例と訳て言とつの
おもふと更れば言〻〻若と若の字も清若と清じると又和家英に和

文の詞と不可非等の下のいの字い清て讀むと又漢文と紀
ちるいんの跳假字とかて体めるれ不可非と濁りて讀べし
自則のかさもんの字とかれば自則と濁て讀むと右等い皆濁音
と云ふ若と叔又不撰と云ふ詞のいと引と讀む等し浮撰等いは
ま唇同同の例うて浮撰とも通り唱る詞うれいのいの字と唇て讀
べし弦れども希といのいと清てまと通る詞と痛と云ふ類と又新し
さいし等のいの字い術字なん欲又体假名なる欲はとまと通りて
唱る詞い昴粘狭撰浮の類と是はま唇同の例と云ふ若なり

ひ　ひと　ひと同じ假字と云ふ目抜云上と云ひ下と云ひ口合と云
ぬと浮い初いて清ぜり。ひの字と助假名と用る例い或い古

鄙都の類に又ひとふに二通ありて嘆ずる。淺花艸より凡人とみるを凡人と濃く伊勢物語よりみくとるとみくくと憂むの類に又はま同の二三通ありて常人を小人惟慮と濃むの類に也ふ曲とこふ云へ。扱ひふへの通い。

其稔のおよ。濁のへのひふへと毎ふ俗名いたぐ。行行行の文字濃り。あふ合買。絢ふ遣ふ辞ふ云ふ食ふ吸ふ結ふ辞ふ乞ふ恵ふ。冨ふ出ふ老負遍使ふ拙ふ頑ふ向ふ近遠ふ苛ふ叶ふ祝ふ呼ふ侍ふ。

賜ふ接ふ拂ふ食ふ習ふ洗ふ婚ふ墓ふ奪ふ貯ふ泳ふ救ふ拭ふ報ふ狂ふ赴ふ。

憂ふ苑ふ囲ふ濃ふ喰ふ惑ふ句ふ思ふ通ふ迷ふ嘲ふ揉ふ拾ふ隨ふ書ふ伴ふ。

占ふ味ふ敬ふ訪ふ吊ふ待ふ調ふ粧ふ濡ふ絡ふ裏ふ爭ふ負の類に飯い

惟知ずし。扱又ひの字いみよ濃くて。其稔のおよひの俗名をみと濃むるいの嘆の蛙浮ふよ毎ふ俗名と濃り。毎稔ずるに。ひ多い濃ならん先嘆蛙の下いいさくしうも。又びぶべ。みむめも通ずる。ひの清俗名と用ひそみと濃むよ。ぼど。又浮撰の類はま同の例なれば浮の俗名と濃べきなり。濃者よひさうくの濃を通と云る例と立て。嘆蛙をぐあるいの方拓の濃よ濃る歟。又いさうくの毎を語て。いさうくとんるるるやひとをよ通ずす河い。塀塘地撫浴淋

常神並の類。毎はま同の例と知ずし。又寒にひの俗名のいよ濃く例と。鄙方よりて云くひの俗名をいと濃む例い。相こま或價葵

嘆ずるに十分仮擬詰盥勢同一略日平多い故ゆてひの俗名と用ひ

るゝれば、いゝよ濁ぐる様ゝよ公を分べし。

ふ　布　婦　同じ假字ゝ、脫目抜云、下ゝ言る布ゝ、下を分どふゝ。

ふの假名のとゝよ濁ぐ、唱へ、日今日　福生　芝生　鞏生　祝新候　鬱

俤　危　家　揉　蕪　を以假名の帳の影ゝ。うゝよ濁ぐ、ふの唱へ、初の

うの終ゝ出せり。又ふゝしゝむゝと通ふゝ。煙　被眠　夢　戦　寝後　襲　紙

傾の影ゝ。有拍の字ゝ、ゝの字の終ゝ出せり。又出衣を出衣と唱るゝはゝ

呉音同じ之又通ゝ。扨又ふゝむゝ通ゝ詞ゝ。意　添　云　行　吟　退　去　抜　別　生

上　教　楽　越　如　何　為　なゝど通ゝるふのお紫い下句しゝ詞なれば、ふ拍語

叶子多ゝ、ゝんの出ふを用いて也り。世俗日ゝ唱る詞ゝいふのお紫を用る。

是はま同の例なれば、うの假名ゝよ濁ぐゝど、又飯　揉　詠　唱るの唱を

飯　揉　詠　唱ゝと唱るは、ま同の例なれども、毎唱ゝよ好ましゝぬ詞ゝ

飯　揉　詠　唱ゝと唱るゝ及ざゞし。又謡曲ゝ初ゝ通ゝる例ゝ。石河　河内

多るのはとふゝよ濁ぐて、石河　河内ゝと唱る影ゝ。是又ふをうゝよ濁ずなれ

へ　屋　部　同じ假字ゝ、脫目抜云、ゝとるゝを下ゝを分ゝど出ぐゝ

べゝとゝ。への字ゝ助假名ゝ用る例い頭後孔夕童の影ゝ。扨への假名

出いひふへゝの色。ふるの通。又下ゝ出りて通ゝぬ称ゝ用ゝ。先下ゝ出りて

色いぬゝ。妙　放　留　上　最　援　孔　鼎　傍　偏　古　奇　恠　多の影ゝ。ふ次ゝへ

ふるの通ゝ。場　更　任　絶　抵　異　任　蒼　業　唱　称　備　倍　加　補　交　報

考　嘱　疫　裏　輝　進　存　命　多ゝ。以多ゝ書ゝて仕　蒼　みゝ　ゝも唱る。

事ゝ。又ひふへのゝ三ゝよ毎ゝ多ゝ影ゝ。添る　作　とゝるのお紫ふを加ゝて唱ふ

れども、へふるの通ハ㋕の濁を嫌くのめることなるべし。然後の㋝の音
と係考て、えゆるの毎ゑ混じ濁るべきと、者拓の音ゑ㋮を㋒
ハ望やと達ゑ於㋓ゑ通ふ㋖ハ眠楽と係り、ゑ接ぜるに、ゑ音も濁る
えづと達ゑの下の二字ハ達呉音の別し　如ゑして和訓
ゑ和ゑと望眠楽等の通ハ和訓すてばま相同、又於を於と通ハ
も同例なれば眠楽と假名を用て㋓ゑ毎ふ㋖と、詠しい可なれど
も、同意の望と達於を㋮ゑ望く〳〵といふ可し。毎ふといふべきれど
望くといふべきなり。故ゑ思今詠まて云。㋮ゑ通ふ〳〵ハ毎や女部む㋓
ゑ毎ふ㋖ハ眠傾己上望親望孫女部む何不分眠楽傾の類ハ、ばびぶ
べぼとまみむめもれ毎ゑを孫なれども、まみむめもの方和なる者なれ

ば、和語ゑ濁る事。

ほ　ほほ下中同じ假字〳〵脫目拔云大形也若て惡しきさ假
名下ゑ出ざる可上下を分ぞほとる者拓の音ゑ類羊と音を濁さ
る文字ゑハ㋕の字を出て㋒とハ濁むと。濁音の字ハ蒲羊蒲菊
蕈宝那巖撫潤蕈蕈子也等。又捧ハ捧の音なる故。ほの假名
を用ひど、又音の字の如きハ濁音なれども、形ゑ用ゆる㋕ハ濁れば自音ゑて
音と訓むと。又於ゑハ新蕈中ゑ㋒と云ふ假名ゑ又下の穂の字ハほそ
㋒と濁むと。下の穂の字と言ふハ初穂水穂玉刈穂之穂湯の類
穂の字㋒ゑ濁じ濁むると。故又濁廬香蕈水桂沸ハ濁音ゑ
濁ゑ下ゑほの假名を用て㋒ゑ濁ぜり。予謂ふゑ濁ハ音と紙とし。

盧い香を緑とし香い匂を緑とし〜萋い萋とも訓ひを緑とする
るゑん。水粧沸芳いめなるあるを知べし。又鐵遠芳い跳芳ふ
えん。下よ㋕の字と共いまわり。是鐵い堅魚の合字なり。うをとい
くうをの異訓。たうと及ぜつ。うをとあるえん遠い又
えん。右芳の如さい後の若子を使つべし。扨又㋖と㋙れ
通ずる洞い紙之燒守の彩。是はま同の例。はま同ゑこと通ずる
ゑ鐵の類是なり。

「ま」まゆ毎海同じ假字。㋝の字を助假名よ用る例い夕著駕ら
まゝくの類。扨又倣申回猪嵩人大臣芳の假名を㋕よ猪
り。又いうふの出ふとまよ猪ゆ。しんゆ蓋て猪ゑ。うび

「み」ゑゑ同じ假字。脫目抄云とよあざるゑ。下よ㋝ぬみと。又
同書云。谷沢さ。
夏ぐし。㋝とき。ゑ同じ異の假名。とる是肉のかま同の例。者
ぐさ。舌ぐ。更く。雜同と雜同と更假の彩。又㋝の字を
助假名よ用る例い。ゑよ海。ゑ海。ゑ海。ゑ

野の道路命の類。是二三相通の例なり。

【む】音莽莽（ん）輕音　同じ假字こゝに眼目物云とよるべきるんしてよるべきる

むとゝ。是んハ跳る時なゝでハ用ぬ故。よるべきるん。有相のおよる。唐代

文でうゝゝゝふ文字ハ梅馬の類㋝の假名でゝし。愚云梅馬宜しく㋝の又假名でゝしと論ずべし

の字ハ梅るとうゝ縛ふ字ハ縛ふ字ハ產生。愚云產生を奪

る。こゝ論めり。又矢塚本ハ㋝の假名ハ語る。是ハ乳母の字ハ㋝より後語

弟ハ熱のそゝるれば必ず㋝の假名と用ゆることなり。扨跳假名の事ハ。

天竺ゝてハ跳字を宮忘と宮ケ。㋝ハ嬉用㋝ハ吉用又通嬉吉二内ニ云

ゝこゝて三内と別とり。故ゝ嬉用の梵字とび㋝の經音ゝて跳ケ。漢字ハ強盜と通ず

盜と通ずる　吉用の字ハ㋝の經音ゝて跳ケ。漢波と漢波と

假名と用る例なり。唐用の字ハ㋝の

經音ゝて跳ぬ。ま万桃ともの經音の字用ぬい嬉吉二用ゝ通ずる吉字なる故。

んと用ゆる法なり。

梵漢共ゝぬの經音を用る事ゝなり。日本の跳假字ハ古事ゝうんこ

の字を用ゆ。ゝ二字ハ先哲先武の字を省て制ゝれりと。法ゝるべ

ゝれば。武の艸書のむ！年の字を省ゝる厶の字と同音の字ゝ。然れば

日本の跳音ハ。何れも㋝の經音を用ゆとゝて弘法大師も母字

ゝ如世雜常と㋝の音ゝて跳ケ。然れゝうれ經音ぬの經音

の稱も可ゝあるべ。假名ハめゝを通ハし。去ぬゝと去ぬゝと通

し。爲ゝと爲んと通ハし。唱ゝ彰の跳假名ハ㋝を跳ゝる。又野人の使

ハ爲不爲とゝふ二ツの別音に混同して分ゝる事ゝなし。爲ゝと通

ゝとハ同の例ゝて㋝と跳ゝる。又不爲とゝ通ゝるハ。ざな同の例なれ

ども㊁の音を用いて不為と訓る時は世俗の誤なり。又㊂と訓る例は乳母・娩産・奪取・望乗の訓と芳と芳しと考と考ると訓ずる訓なり。又㊄と訓るの例は掃る・宣の類是なり。試験の類誤れる准知るべし。

所字又十字の内ヨンの字なく。又毋字四十七字内内ヨンの字なきなり。是ンんハムむの音の字なくして訓る時あるべき用いざる假字なるべし。又京字㊄の音㊁の音より用る假字なきが故なり。梵字漢字ヨ点なるなり。三内の別なくンんの二字を借用るなり。唐音二内れ音を漢字に訓音より用る例は下巻字音の訓義の訓を以て解べし。又㊄の音を㊂の音に訓ずるなり。假令ば文字蝟蝟なども文字蝟蝟なども蝟と唱へて和訓のごとくなり。是音より誤む時は訓音用い難きなり。

まこむめものこと和語の訓の讀曲ヨンの訓假名を加て唱るなり。假令ば東南喉等筆札壹監の訓。又古人の文ヨンめり。是ヨンめり・老ヨンめり・作るなひてんぐり・拙見てんぐり・退出させて退出と云ふなり。御息所御息所と云ぎを日の二三通ずるの例欲など讀せる類のんの字い体假名ヨンて濃曲と云ふ者と訓ずべし。

め メ

同じ假字ヨ㊁の字を助假名に用る例いまれ。まめる是あめりの類。又細語ヨンめの字是ヨ。又和字の出紫ヨ㊁㊄通ずるなり。假令ば叫ヨン難ヨン見ざヨンやるべ云ふべきを叫ヨンめ難ヨンめりざらめやと訓る訓ヨ。是ヨ二に相通の例ヨ。

も モ

もを母音義同じ假字ヨ定家假名遣書云。上ヨ出ざる

ヒ　上下とからぢもとゝ。仮名拗よい上よ出ぬとゝのこと。又同書よ。はと
ほとゝふゝと示して云く出て月ちいなどゝ云べきを別くるゝ所て傳
も指合べ出て月ちもと更ゝべし。いとも二ッ仮名ゝ。はは同の
初又通ずるの例ゝ。又万葉に懇と綣とせり。はいむもこゝ又おもせ
ゝ。扨又ゝもゝ扨もゝどの。もの字を助仮名ゝ用る歌又い出ぬるゝ歌

やヤ　原同じ仮字ゝ。やの字い助仮名ゝ用る事ゝし。細出宗の新
又和字ゝて。指や。出て。のや。体めや。名。何れも。やゝて助けるゝ。消を。
癒ぬ。名の。やも助てゝ似れども。頼らくい。訓字ゝん歌。扨漸。猶
名の称い。よの仮名ゝ。ふゝ。ゝ。ゝ。

らど・ゆよ・ゐ・く・え・ん・え・ゐの通のゑうよい・奥の名と云るいう名の通の
事とんゐぐし・又の字は中の㋑のえゐると通ふ假名ハ只・消・見・消・見・
ゐひぐ・ゑ・ゑ・ゑ・ゑゐると通ふ歟い・湧・生・絶・消・見・愈・冷・飢・居・疎・越・蔕・
燃・肥・癒・抱・障・淫・歷・教・阿・費・名・飯い・濃・知ぐし・右の字を
見・費・ゑゐを・暑・ゑ・ゑ・ゑゐ・ゑ・ゑ・ゑゐ・ゑ・ゑ・ゑゐ

五と犯ど。助假名の例は窮ら 古今集 清ら野ら指らん 指らぬ 以上見後篇叫

などの㋺は助けるゑ。又謂ゑ持不持は持不持のちを略せるなるべし。

リ

りゆ事第同じ假字ゑ。恵按ずるに㋥の字とんゑ通ぜる後世あり。入物成湯宛去 向治可 可見盛也 可書帰 去来の類ゑ。是らは同二三通の例なり。

ル

るる事は第同じ假字ゑ。恵按ずるに㋱と㋬ゑ通ぜる説ゑ。假令ば何とか為るめは為るなどゑ。何とか為るんめは為るんと云る類ゑ。又㋱と㋠ゑ通ずるゆゑ。可見可射可似可著等の類ゑ。㋱と㋺と通ずはらな同の例。㋱と㋠と通ずはいたら同の例と云ふ者すべて其ゑ吾同の事ゑ。

レ

れレ孰を同じ假字ゑ。㋺の字を助假名ゑ用る例は細石暑の類ゑ。

ロ

ろロ路を同じ假字ゑ。㋺の字を助假名ゑ用る例は神漏波神漏美等の漏の字。又万葉ゑ呂と云ふ説と。呂と云ふ説ゑ以呂波字考証云。㋺の字は句の句末ゑ使ひる字なる故。外ゑ㋺の字などもあれど。委後も上下の区別と云ふ説ゑ。悦目抄云。初の一字と終の一字とを書冠ゑ詠む事ゑ。是も只の字は易ゑれども。らりるれろの又文字は大事ゑ。詭諧より外は詠れぬ事ゑ。首尾字ゑ。㋺の字は字ゑ。擬擢て濃も知れぬ名ゑ。私漕ぎ出せ夜半の月白山神より外ゑ詠むまじき事ゑ。すべは詠ぬと。然れば句末ゑ使ひる字ゑと知りぬべしとゑ。らりるれろの文字は事後ゑ改ゑ附く使ひる字ゑと知りぬべしとゑ。

けとも。和語に於てハ別に附く事なし。是天然の國風なり。

わ　ワ　ヱ　ヲ　同じ假字なり。反切抜云。上に出わ。下に出ひ。是ハ自が性よりらべ。何にもあれ若くハ。ゑ。を。悪様なるに。わの假名を多くハ一字假名と成字に用ゆる。三條西延和訓和歌倭国字音ハ一字假名の例。吾亦沢ゐ忘訓和玉椀四惑字音ハ別字の例。又下に用ゐ例い字音まい果光四宮流郭月号。或人云。わの假名を和訓の下に用ゐいゐ。ゆ。ゑ。ゐ。ゐ。ゐ

例へ。掇・渕・弋・居・初・牙・筒・射・場・猎・名・野・獵・吹・獠・掬・師・ものどもの時い。
改字の例より終へるも。位・居・古・井・的・射・師・猎・獵・獠・獠ものの時い。
下より用ゆる。是一字假名の例なり。上下より拘ゆるものゑの假名へ。和訓の
假名者。改字いなく〻いの假名を用ゆる。假名を近道云中のゑをもく
事。外の字者教ゑより通りゑ一形より獠ひい中のゑなゆし。位魂雲牙
初冠推掌絶強育居形枕叶頭ものゆしとも。是按ずるに。右の
四推強より ゑの假名を用るい獠へ。先推ハ推の略字にて和訓より祀
ゑ。強い強とも唱るいゆるの通ゆれば。二字共より いの假名を用ゆし。
叶ハより ゑの假名を用ゆゑさい。蓙杙境奏乾直宿竜放序次題翁
水鶏簾 猟 福 慈 笑へ。後い和字正濫鈔。和名抄 なりて索め名

ゆゑさなり。

う 同用の假字い祝より初の う の終る出せり。故うゑの通とそふい。
獲の通のゆへんゆゑ。考るより ゑ いの假名を用ゆゑ。故又 う の字を
むより通りて唱るものゑ冠 考のまゑ。是わま唇同の例へ。
又 え と う より 渋 て 唱るゑ。是もわま唇同ニ三通ゆるの例 頭
沐 戸 上 坂 手 水 等是なり。又 ふ と通ハし 鞭 を 鞭 と 称ゆるは
まわ唇同ゆ通へ。

ゑ 正 漢同じ假字へ。改同抜云上より出へ下より出へいに合より出ゑ
ゑ。是按ずるに。ゑ合より書く名とい敢帰の顔ものゆゑ。先ゆまい何。
ゑ敢帰と ゑの假名より他しまわり。出ればいに合より書く ゑ とい俗

きの事なるべし。ねは㊁の假名まぢり。ねの通と。ゐたの通の字
音。和訓の字多よりあり。一字假名にて會通惠繪探壞等
音。得餌畫畫柄等は訓。江は中の㊁えとんなどし。假名を近
乃云等未熟家右熟右熟奥の㊁さくらの數多なるまぢさる
と云り。此外は梢末杖実柄の笛吹夢の畧巴友益轅步稲去方甲十干
陽五行。甲はきのえ。乙はきのと。丙は火。丁は火。戊は土。己は土。庚は金。辛は金。壬は水。癸は水。丙戌庚壬等の㊁の假名を用ひざるは
へ。猶るに曼荼の熟の字を出されしは贄の濁なるべし。熟と色ふは中
の㊁を用ひざるは。ゆゑの通の字は㊁の訓より出し。ゐたの通の字は次の㊁
の訓より出せり。

[オ] お同じ假字。悅自拙云。上よりゐたの下よりをを見へ自が性よりう

ばの字もうれ苦くるしぶと。和字正濫抄云。あたの二音は下より附ぶと
るに。惡穢などるに。一切の字音は喉より嚨より歯より唇より鼻より出る故なり
十字もあり始りてたより終れり。あたの二音を唱ふるに。あは開口の
呼音。たは密中の合音。吸音。絶れば。あたの二音は後音の軍
編して自然と下の稱呼に屬せざるなり。和語の下より唱る出聚なる
は㊁の假名を用ひ。をの稱もを下より用ひる皆㊁の假名。たは唯訓字一
字假名より用ひるのみ。されば我。多女子の名より冠るもおの字。中義の
文章なり。於乎。於戲。於是などの於の字は上より使ひて下より用ひる
文法なり。を見て解すべし。者稲たの字は音より興れたは訓より音。
音なり。大音信思汗と綴り。猶るに增の㊁のみは義行拗音

濫し。此とそへ者伝行をたの假名と行者伝行をたの假名を用ひ。大思ひたの假名を用ひ。又一字假名をそ於濫鳥鳴惡飫等ハ者之濫男牡雄百尾等ハ訓之。又字者れ字ハぬたの通。うたの通。忘たの通の類皆たの假名を用ひ。ぬたの通の字ハぬの假名を用ひ。ぬたの通。ぬたの通。ぬたの通

と深くの仮名いのまもそう行のこの初文終ふ者。かさくけこの行まて賞拙
孤源仮時の類ハ初位のかの仮名。乞休囲凄等ハ文位のこの仮名
ハ。右等と初文憨ん時。名出ふを考へて。かの仮名をこの仮名をとは
よ元遠く通り試れば。賞ふ拙へ孤へ源へ仮へ乞へ休へ囲へ凄と成
ハ。賞ふ孤ハ文字と雑ぜ綴るもあるべきが。孤ハ孤を孤ぜ。
初位ハ仮名ハ冥ふ拙ふ孤へ源へ仮へ乞へ休へ囲ふ
嗤と毎ふべき事理の尚也。何まの行まて。拙ハ毎ふ試ることさい。初
文の惑解けて。一冥ふ冥の別ても知る。さもすせその行まて洪小候
越の類ハ初位の仮名まて。洪小と毎ひ候ハ洪へと毎ふ小越と毎
ふ。文位の仮名者ハ源誘続逆の類。上の二字ハひふへと毎ひ逆ハい

きくしうと毎ふべし。たちつてとの行まて祇任者難立竹等ハ初
位の仮字。毛也祇と毎ひ。任者と毎ふると畧し。難と毎ひ立
竹と毎ふ称ハ文位の仮名者ハ同就聰跡の類。毛上の
二字ハひふへと毎ひ。下の二字ハいさくしうと毎ふ。なにぬねのの行
まて。綯付喝倦去等ハ初位の仮名。上の二字ハひふへと毎ひ。中の二
字ハへふると毎ふると畧し。去ハ去と毎ふ。文位の仮名者ハひふへと毎
ふ調の行まて又欲で弱で〻毎ふはま同の例のごとくして。弱ハ尖ハ
冥生等ハ冥尾等の称ハ仮名ハ。下と毎ふ出ふを比者。初位のなと
綯ふ付ふ。はひふへほの行まて遠狩奪猿粘呼云等ハ初位の仮名。
上の二字ハひふへと通ひ。次の二字ハいさくしうと毎ひ呼ハ呼と毎ふ云

へ云と毎ふ。又位の假名をいう旬淫名。是二字共よひふへと毎ふ。まみ
むめもの行まそ舞揚甘酒角力住澁名。初位の假名。上の二字
いひふへの毎甘いさくしうと毎ひ。酒角力と毎ひ。住澁ハ住
澁と毎ふ。又位の假名をい思童名。是上いひふへと毎ひ。下いさくし
うと毎ふ。やらゆえよの行まそ接軍名。初位の假名。上ハひふへと毎
ひ。下いさくしうと毎ふ。又位の假名をハ通迷吟快名。上の二字ハ
ひふへと毎ひ。快いさくしうと通ず。然るに辞絶などの詞ハ。よゆえ
て。位と又位の假名終。是辞絶と毎ふ終。らりるれろの行
まそ洗汚暴名。初位の假名。上の二字ハひふへと毎ひ。暴いさく
しうと毎ひ。又と毎ふ。又位の假名をハ揮呪廣の類。上の二字ハひ

ふへと毎ひ。廣いさくしうと毎ふ。如此よりの出家の毎る詞ハ行の終
まれ結紀し易れども通ずれ終ハ結紀難し。又上と挙ゝる
ゝの出家の例と常よりハ動べきこと。

○和字の出家れ解

まれ和字と詠ずる事ハ此邦の風俗ゝて世と称ぶる久堅天の神
代より傳りて。これを舞ふ道なり。眼ハ見身ハ聞き意ハ欲ふ中これ
事とハ号て情と通るハ是和字のはやおの法ゝぞや。されば人の言と云ふも
云の和ふとも言るハ少ハ根ゝ毎ゝ言ハ和ふ。又言の助と出ふ。
もとハ伝ふる事ハ。扨ハ出家の間ハ約假名伸假名と云ふの二義ゝ。
に何れも相通及切の則と漏るハなし。扨意ハ巧めるゝ所ハ

あメ吉天慈の妙なるん古の和歌又は拾遺などよりそ引るゝ伸るの詞
多し近世よりは希なる我ら見てさうり見聞古と今の世のくの詞も変りしあと
らん歟此ごろ引めるる詞と云ふ俗今べ和歌よりは吉野のるる春日のるな
ど詠しい伊勢物語在るとそ名付を指をの詞すして尓在を引てなるゝ源
氏物語万葉集よりは吉野在春日尓有と書りそなるでるど詠しいそろよ
あでゝそゝ引めるを引めしゝ陰のんと源しいよりあんとゝ引めしゝ
今倒反の例を引てこまとを反せびにあ反なる帰ゝ又兎もまれ角もまゝ
れと急まれ角まれと引め見まれ不見まれ不見まれと見まれ不見ま
れと引め時〳〵まれまを時〳〵まれと引めし類へとあ反まゝ又拾ゝ
ゝ引ゝを拾よりゝを拾と引めし類へどあ反ざゝ又引くゝれ迷しも鳥

孤れとゝ引ゝを引れ迷しまとゝ引めしゝ今世俗の詞よりゝ疾くゝれ迷く
ゝれ早くゝれ速くゝれを疾れ迷れ速れ速れと云るに同じく
て〳〵あ反ゝ又ゝ引ゝれを年れとゝ引めし類へかあ反かゝ又ゝさまゝ
さまゝぬゝよりさまゝ乱ゝ引ゝる程よりさまゝれ引ゝ
ゝを引ゝ引ゝぬゝよりゝ乱ゝ引ゝ引ゝれ引ゝるとゝ引めし
しゝさあ反ゝさゝ又ゝ怨ゝを云ふ衣曝を云ふ衣曝を
ちゝ引めゝ門閉りゝゝを門閉りてゝゝ引めゝ待ゝを待てゝ引ゝ引めゝ
しゝとゝ反ちゝ引ゝを二に相通されべてゝ引めゝ又万葉集荒磯海を荒磯
海と引めし類へらゝ反りゝ玉中を玉中と引めし類へにう反ぬゝ又ゝ重
と重ゝ消と源ゝ消ぬゝを消ぬゝと源しし類へさえ反けゝ又陸奥を陸

奥と深しいのおくの又樓ぢるにこちのくハこちのくゆの畧濃なる
ゆこと歌、谷の調ゆなどよハこちのくふとあり又むつれゆとこふハみちれ
ゆを解るこけ解る方と彼方ひ方と彼方ひ方と深こるハのかなこ解
と解と唱るハこたなさこ解と解と唱ぶハさおなとこ生と生と
唱るハうまなあこあつをあひとあめしハたりなひこあるとあふと
あめしハるなふこあれをあくとあめしハもれなこ為らんと為
らんとあめこるらんとこらんとあめし類ハるらこ沙ゆ伸こる調
と云ふハ解令ハ解ゆぬゆとこ深ゆをとゆくゆと伸ゆ不前と云ゆこ
と不前と伸し類ハなくなぬこ又秋の石ゆの為ん為しと英まくる
惜しと伸し類ハまくなむの解名と逃こる深まく惜さ産れゆる解る

ど深しい深こ惜さこ云ゆさを伸こる見ハまくなむとみよこ三通せ
る深又古今こ人のゆくくよと云ゆさを人のゆくくよと伸こるハかくなこ又
云ゆくくと云けくくと伸しハけくなくこ又憂こる飽さぬと云ふと憂
けくこ飽さぬく伸こるハけくなくこゆくこと三通ずこ又解こる沙く云こる
のこるさここるゆさを又こらくゆく云こらくゆのこるさこ伸こる類ハらくなこ
又深こ云ゆさを深ひこ伸しハらひなりと解こ又事の投ゆくくと投ゆけ
くこ伸しもけくなくこ又巻こるを老こらくこ深こる為こらくなこふとひハ
二三通ずこ又云ひこるを云ひこらくこ伸しこる古今の調ゆこよここう
見るこらくなこ又晴さこ晴さゆこるゆこ云ゆさを晴こさこ伸こ
事伊勢物語ゆ千載集の詞ゆこよここう見るかなこらくと解こ又歳

拾ふ〻伸べでとるべきを、ゆゑうませべでと伸るるい、ゑ二重及結の例まで下よ
りませと及せべめと帰り、かめと成るを再びかめと及せべけよ伸べ、又拾の
本舞よ落れて〻ゑべきを、落ろひて〻と伸しいろひ及りとれよ二重びるべ、
又結べべとるべきを、結べれべと伸しべ、又結べれ及べ、又ゑん、ゑでゑなどゑべ
きを、ゑるゑん、ゑるゑべ、ゑるゑでと伸し頭いちゑ及たん、笑ん、笑て、笑でとゑるべ
きを、笑ゑん、笑ゑべ、笑ゑでと伸し頭いきゑ及ゑ〻、ゑん、ゑゑむ、ゑゑでとゑるべ
きを、ゑゑん、ゑゑゑべ、ゑゑでと伸し頭いりゑ及ゑ〻、ゑん、ゑむ、ゑでと、ゑゑん、ゑ
ゑべ、ゑゑでと伸し頭いひゑ及む〻、ゑん、ゑ、ゑべ、ゑで、ゑでと、ゑゑん、ゑゑ
べ、ゑゑでと伸し頭いしゑ及し〻、ゑん、ゑで、ゑでと、ゑゑん、ゑゑべ、ゑゑ
でと伸し頭いえゑ及まん、ゑん、ゑで、ゑでと、ゑゑん、ゑゑで、ゑでと伸し
頭いゑゑ及さん、又、ゑん、ゑゑべ、ゑゑでと、ゑゑん、ゑゑべ、ゑゑでと伸し頭のゑ

い助字ゑ、にけせてねへめえれゑの撥通をこれよ同じ先の例よ混ぜべるべ、
又似るるゑゑ、ゑべゑべ、ゑべ結べべゑゑを、ゑべべゑべ、ゑべ結べれべと伸し、ゑ
を、ゑまれらべと伸べ、託てべを、託てれべ二例見左ゑ序と伸し、ゑゑるるを、ゑやれるるる
と伸し、れの字も助字よ似て、ゑゑん、ゑゑべ、ゑゑでの頭ゑ同じゑべ、ゑ
いえゑと及せべやよ伸りて、ゑん、ゑべ、ゑでと成りて、語通ぜを、ゑよゑい助似
ゑ、ゑれべ、ゑべれべ、結べれべの頭いへれ及へよ帰りて、ゑべゑべ、結べべと成り、ゑ
まれらべを、れらと及せべらよ帰りて、ゑまらべと成り、託てれべとれと及せべ
てよ伸りて、託てべと成り、ゑべれりと及せべりよ帰りて、ゑやりゑ成
りて、語通ずるべれよ、れい助字よ似ぜと知るべし、又伸るを切るんと伸し、
頭いかむ及く〻、ゑふを、ゑるんと伸し頭いむむ及ふ〻、ゑるを、ゑるんと伸し

頻いらむ反る。成を。成さんと伸し頻いさむ反す。結つを。結ぐんと伸し頻いたむ反つ。去ぬ（ぬ部のぬまあず。るの字を異すべし）を。去ぬんと伸しいぬむと反せばぬ。住むを。住まんと伸し頻いまむ反む。俗いは准ずべし。たるの韻いトよいなをもちの出来。又いはと云ふ韻を附て唱へ。先よ設けて後よ解く韻へ切云まを成。訪去住などく連る。志を本る韻と同じうす。能く考へべし。叔又。不と云ふ韻を。不不と伸しいぬ不をらむと反せばらよ為りて。不と為る。芝をらむと反せば為りて。不と為るざると反せば為よ不と為る。又。弓し。さと云る二つの韻いりの伸弱。らし反りまて。りと為り。そり反さまて。そりの弱め。俗今べ。裏まよりり白ぬのまてい韻ら反へらぬ友。裏まよりと伸べ。又。家義よりりと人よ為る。と。諭てい韻俗

家。家義よりと人よ為る。と。弱めし頻へ。又。なし。しいなりの伸韻して。芝をらし反りへ。又。秋も遊めりと云る。遊りと云ふ韻よしてぬめ反ぬへ。狩原へ今日。焼めるい。焼る。芝焼と云ふ韻すてくめ反げへ。又。濡れる人よ熟せて。濡さんと云べきを。濡ると伸しいるめ反れへ。又。拍詩の韻よ行めれ。付めれ。言めれどなどもしい。祈け。付け。言どもべさ韻へ。芝二重反結の例すて。先の二つはめれ反めよ為ると。又くめと反せばけよ為りて。行け。付けと為る。言めれどをめれと反せばめよ為ると。又ふめと反せばへよ為りて言どと為る。又。鈍ひ。座止悔笑の顔を。笑めるの反む。坐座下笑と同じ。止悔と伸ると。ひし。俳は准ずべし。又。曲る。下る。上る。苟る。偽る笑の類を。曲る下る上る苟る偽ると伸しも。れは助字よ也。れる反るまて。

し頭を振りし。濯て洗ふ。又濯と濯と伸し。撰を撰撰と伸し
ハ先ッ浮とめると反せバむを降りて濯と濯る。かむと反せバくを降りて濯と
濯る。又撰をべると反せバぶを降りて撰と
濯る。又ぶ尽せよ。何とせんやのごとくをそよ何とそんやと伸
し頭ハ赤て反せ。又今幾日ぶ尽てわり葉摘てんなと詠ハ摘ん摘ん
と重る詞を使ふるそ。こて反めん。又ぜん。ん。と云る詞ハ先ッ
せんをせふと重ひ。ん。ハ先ふと重る。又せうと云ふ詞ハ赤る。の弱め詞よ
して。赤け反せよ降りてせうと濯る。又赤る。ごをせうと伸
ハせう反し。又燈とる竹ハ萌なん萌ん萌ぶと云る春日野ハたゞ重
の日又仕せたうと詠し。後のなんハ仕さんと伸し出家して三重反

清の側へ。先づらを反らよ降り。次よだら反ハたよ降をせたと反せバさ
よ帰りて仕さんと濯る。又ぬんを。なんと弱めて事もみを見ハぬら
反なよ降る。又濯さぬと云ふべきを。濯こうぬと伸ふ。又濯
よ降る。又咲く。濯を。清つ。兼ぬ云ふ。住む。知る。その類を。咲ける
せる。清てる。兼れる。立る。住める。知れる。と伸ふる
類も基名し。是世俗の云ふ兼知。下搖。寝なと通唱る方儀の
俗名ハ語を吟変古よ変を吟じ試べし。又濯る。変る。振る。過る。を
振れる。変れる。振れる。過れる。と伸し。れる反る。帰る。又。飽く。増を。立
つ。去ぬ。変ふ。止む。見るの類を。飽こぬ。増ぬ。立ちぬ。去ぬ。変ひぬ。止
ぬ。見てぬ。又。飽ころ。増つ。立ちろ。去ひつ。止まつ。見つる。伸

るゝ・先のくをつぬふむるの出ふを・げ・せ・て・れ・へ・め・れ・て伸る
ゝ例ゝおゆふ・須ゝ・きく・ちぬ・ちろ二反す・ちぬ・ちろ二反つ・よぬ・ちろ二反ぬ・ひぬ・ちろ二反ふ・ふぬ・ちろ二反む・りぬ・ちろ
二反る・帰る・右等の須ハ下よるれらんべし・等の出ふを・ぬて・唱る・三字は
字又字等の須・進へて・初るべし・又・来る・唱く・ゝふ須を・ぬ・ぬる・唱ぬる・ゝ伸し
・先の須ハ・さぬ反くゝそ・ま・る・ゝ・ぬれ・て・後の須ハ・上よ出せる・飽くを・飽・きぬ・きつ
と伸る須の下よるの出ふを加るゝ・須仮へと・初るべし・先も二重反の例
と・ぬて・ぬるゝ反せべぬよ帰り・又・さぬと反せべくよ帰りて・唱く・ゝふ須よ・納
る・又・見ざりせべ・ざりせべ・なりせべなどゝるハ・見ざれば・ゝ・ゝるれば・なれば
と伸るゝそ・りせ・反れよ帰る・又・すんゝゝべ・ゝ・ゝ・ぬ・ぬ
んゝ伸るゝ・見よ・よ・挙ゝる・場・と・場・ぬ・ぬ・ら・伸る須よ・らん出ふを

加るゝ・須ゝ・ゝて・す・ゝて・ゝ・ゝの二反・すよ・場・ゝ・ゝ・ゝ

又らく反るとりは二三度じて次第ともゝ優むゝ又云ゝと伸さ
るゝいらく反るゝ又疑と疑と伸しい二重反てらく反るゝと又ふるゝ
反せばふは帰るゝ又恐と恐と伸しらく反るゝ又謂とへらと反せばへは
ゆるゝと謂と優せるゝ又謂と謂と伸しい回る反ゆゝと反ゆゝと反
せばふは帰るゝ又回と回と伸しいく反ふゝ又回と回と伸
べ又まのまて助けて回とゝ嘆とり見さく反すゝと帰るゝ又回と通ひし
優むゝ又まま同の例ゝ又ゝ素面也己と素面也己と伸し故いまく反むゝ反
るゝと例ゝるゝ又形と形と伸しい形むゝ反くゝと三三通せるゝ形使と形し
使と伸しい形つ反むゝ形合と形合と伸しいせろ反すゝ形進と形進と
と伸べ形溺と形溺と伸しいへつ反ふゝ形越と形越と伸しいえつ反ゆゝ

形論と形論と伸しいむづ反むゝ形逝と形逝と伸べ形拳と形拳と
伸しいけつ反くゝ形解と形解と伸しいれつ反るゝ形弱と形弱と伸
しいねつ反ぬゝ形出と形出と伸しいでつ反づと伸るゝ又深と深祝
と伸しいむず反むゝ又須と須と伸しい二重反てらく反ろと帰るを
又ろと反せばくゝと帰るゝ又故と故と故と故と伸べ優ひる見三重反
の例ゝ先づ必と反せばえと伸るゝ又がえと反せばげと伸るゝげと反
せばれと帰りて故と故と故と故と伸るゝ又故と故と上暑して故と故と
優むゝ又れ如ゝ新る故すゝ須をかるゞ也くよと伸めくあゝ又これとるゞ也
へゝと伸めゝと反又れゝるけゝと伸めしゝ又分謂勿視ならの勿ゝと云ふゝ
勿と云ゞさと伸めしゝ見くわ反かゝ又不一哉と云ゞさと不一哉と伸し

ハよあ反ゐ〳〵〳〵とゐぐさを伸しいらひ反る又古点ゑ者
とゐぐさを者と譌せるを是といと反せびちよ為をてゐ二正通じ為る
又不非とゐるを不非と伸体しいずむ反ずゑ亦形を形形伸体
しいくむ反くゑ又飯則を自則と伸体しいよりむ反るをりゑ三通
じやとさむ反くをさゑ三通ずる又耳を〳〵耳と伸しいらく反
る又如を如と譌めしい二重反をてゐら反ゐと為を又くゐと反せび
かよ為をけよ初正通ずる例ゑ又拘弦竹ゐ弦ゐ別雅さゐ
をぐ反ゐめれを言ゐいゐられを伸ゐる〳〵りめ反けゑ為りめりいゐさを
伸ゐる二重反の例ゑめり反ゑと為を又ゐを反せびさよ為ゑ又思ふ
らめぐゐるい思ぐを伸しをてゐらめ反れと為を又ふれと反せびゑ為

ゐゑ起すらめぐいを起せゑの伸須をゐらめ反れと為を又すれと反せびせ
よ為ゑ見ゐらめぐいを見れぐを伸しをゐらめ反れと為を又ゐれと反せ
びれよ為ゑ又ゐまゐまゐびと言ゐるいゐさびと言ぐさを伸ゐる二重反の例ゑゐら
と反せびさよ為ゑと又ゐまさとゐるせびまと為ゐ為ゐらまと反せびらよ為り
てゐびと言ゐ須よ納法ゑ又ゐを〳〵ゐると言ぐさをいまをゐりゐると伸ゐる
ゐこれ二重反の例をてゐりと反せびさと為り又をてさと反せびをと為ゑ
又ゐらぐゐらぐとゐいゐらぐの伸須をゐ〳〵ら反いと為れり又ゐをりゐゐん
とゐいゐりやせんを伸ゐるをゐ為ゐけ反せゐなれびを為りゐれびと伸しい
りけ反れよ為ゑ又言びとゐを須を云れびゐる云ゐれびゐる云ゐれば
ゐる伸しいぐ言りゐれびを〳〵りと反せびひよ為りて云ひゐれびゐと為

る・し・汲とひけと反せばへる・帰りて・云へれば・反・見をへれと反せばへる
帰りて・云へば・ゆる・云ふと・ゆる・汲・云ふと・ゆる・云ひ・ゆると・ゆる・云り・ゆると
も・伸し・伸ず・云り・ゆる・をへりと反せばひる・帰りて・云ひゆると・ゆる・見をひ
けと反せばへる・帰りて・云ると・ゆる・見をへると反せばふる・帰りて・云ふと・ゆる
へし・餘の・汲い・類を・以て・準へ・云べし・扱又・捫・通・桐同の・例・を・生ず・倣・令べ
河・赤・垣・編・紫・綰・汎・旱・爪・琴・七夕の・素・竹・花・蓮・泡・折・社・赤・岳・小・枝
以上初二は通　以上初二は通　以上初二は通　以上初二は通　以上三二は通　以上三二は通　以上三二は通
定　上は初二は通　隼人・和　以上初二は通　河・関・石・河　以上初二は通　蝙・蝠　上は初三は通　多・桃・天
高・中は初三は通　高・中は初三は通　高・中は初三は通　高・中は初三は通　高・中は初三は通　高・中は初三は通　高・中は初三は通
方・田・上・指・帰　以上初二は通　敬・英・英・蘭・角・力・蒐・蔓・人・切・蔓
以上初二は通　以上初二は通　以上初二は通　以上初二は通　以上初二は通　以上初二は通　以上初二は通
矢・橋・鍋・員　

川　鹿背山　名所淀　名所嵯山　名所橋　西橋　五敷　子孫　むまの後をくるのをもむとるがせ
　　ちりぜやろ　ちりぐれよどえ　ちりこめ　むまこ　負て孫と和訓とするホロじ　我背
子　家姉子　かときハ西三色じ　ハ行　女子　女子の都　仏殘別去　十市　爲丸　接系　乳ち　叔
　　家姉子　字之男子女子の数之　ちんぎご　ちぐまりさのえ　いち　まるひのさ　ちくまりさのえ
姪　揭　交　被　漳　改年　号之　餘い色之准　初ぐさ　又狐と狐と狐り　猩と
　　とこるのちもぐ　ちじるくるのさろ　あくさろ
狸と狐り　鬼と鬼と鬼り　河獨と河獨と狐り　土豹と土豹と狐り　狼と狼
と狐り　布と布と狐り　女と女と狐り　唇と唇と狐り　猪と猪と狐り　又夢
と夢と狐り　薑と薑と狐り　荊棘と荊棘と狐るの故を挙て教誡し　又世
俗日用の鄙俗を教誡せるなり　又幼児の牙齒全くうごれば狐狸のうるの
し　始れども畢竟を涉事故を此を贅せざる先を言るなく　あまたの天然の
如狸なれば　三國及び夷蠻も言ふ　紂れ　横直物の差別と通同及切
の法則を滴る事なし　と理會もとぐさ　和漢字名彙巻之上　地大尾